

# 難波西鶴と 海の道

【5】

森田 雅也

江戸時代は鎖国して、西鶴に限らず当時の人々には、世界市民として生きていたという感覚がありました。外国入排他は、攘夷思想が広がる幕末になってからです。このころには、西鶴のころにオランダ商館にオランダ人としてやってきた見聞好きのドイツ人医師によってヨーロッパに広められた語です。

西鶴の作品に『日本永代蔵』『本朝』二十本

孝などがあるように、西鶴に限らず当時の人々には、世界市民として生きていたという感覚がありました。外国入排他は、攘夷思想が広がる幕末になってからです。このころには、西鶴のころにオランダ商館にオランダ人としてやってきた見聞好きのドイツ人医師によってヨーロッパに広められた語です。

西鶴の死後、幕府の実権を握った新井白石などは、ご禁制のキリスト教布教のために屋久島へと潜入したイタリア人司祭のジョヴァンニ・シドッチを逮捕

## 国際人だった西鶴

しますが、逆につぎに西洋文化を学び、『西洋紀聞』という書物を著しました。諸外国の歴史・地理・風俗などの学習のため、ひそかに写本で読まれたといえますから、日本人にも世界に興味をもった人が多かったというこ

大坂北堀江生まれ、江戸後期の文人、木村兼霞堂も有名な国際人です。蔵書家、本草学、画家など博覧強記の兼霞堂ですが、ユニークな研究で知られています。例えば、『一角纂考』(1795年刊)。北極海のイッカク鯨から一角獣、ユニコーンの存在にまで論じているのです。木

村兼霞堂は世界地図が頭に入っていたのでしよう。彼のコレクションは数だけではなく、顕微鏡を持つなど恐るべき国際的視野の持ち主でした。その詳細は別の機会にまた。他にも国際人の名は挙がりますが、当時、西鶴のあだ名は「おらんだ西鶴」。白い大柄な人、目も鼻も異様なオランダ人。何をしかすか分からない談林俳諧の旗手西鶴には、ふざかしいニックネームだったかもしれませ

海の道は世界に通じ、誰にも止められませんが、本朝も国際人で書いた。『日本永代蔵』巻五の「廻り遠きは

時計細工」には、長崎商いの例として「電の子の二尺余り(六十センチ)」を「二十万(二百万)」で買ったという話があります。「電の子」とは、オトカゲです。インドネシア産コモドドラゴンもその一種です。「電の子」とは「コモドラゴン」。偶然ですが面白いですね。

また、「火喰鳥の卵」を買ってふ化させた話もあります。グテョウに似た火喰鳥を私もオーストラリアで見ました。西鶴は餌は炭だと言いますが、本当でしょうか?

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

# 西洋文化に興味抱く庶民多数